

世界の茶の文化セミナー

— 「受講ノート」(文責:市民活動団体“堺なんや衆”理事 前田秀一) —

古今伝授をめぐって—「堺伝授」とは何か？

大阪府立大学人間社会学部 准教授

博士(文学) 西田正宏

1. なぜ、「世界の茶の文化セミナー」で「古今伝授」の講演なのか？

1)「牡丹花肖柏(ぼたんかしょうはく:1443~1527年)について

牡丹花肖柏は、京都に生まれ、中院家という名門の公家の子でありながら幼いころから世俗を嫌い、学問風雅の道を歩んでいた。20歳の頃、連歌師の心敬の弟子になり、その後、村田珠光に侘び茶を学んだ。

25歳のころ、応仁の乱(1467年~)が起こって池田氏に誘われて摂津の国池田庄に難を逃れ、「夢庵」という庵に住み“夢庵”と号した。30歳を過ぎて、もう一度、連歌の修業をしようと宗祇に弟子入りし「古今伝授」を授かった。



1518年、北摂(池田)が戦乱の地になったため堺に移り、豪商・紅谷喜平の世話になり、現在の堺区中三国ヶ丘町に庵(現在の曹洞宗・天皇山「紅谷庵(通称“べにあん”))を構え、和歌や連歌の指導を始めた。当時、裕福で、経済力のあった自治都市・堺の商人たちは、教養が豊かで文芸に親しむ者が多く、彼らが弟子となり、またパトロンとなって肖柏の文芸活動や生活を支えた。墓は、現在の臨濟宗大徳寺派龍興山・南宗寺(堺区南旅籠町)にある。

和歌大辞典(島津忠夫執筆:明治書院刊)によれば、宗祇からの「古今伝授」を、晩年堺に移住した肖柏が堺の町人に伝えた流派が「堺伝授」とされている。

2)牡丹花肖柏と「茶の湯」の関係について

『山上宗二記』に、「世間雑談無用也」とする「茶の湯」の席の様子を歌った“夢庵(肖柏)”の狂歌が紹介されている。

3)「茶の湯」と「伝授」の関係について

茶道伝書の形態の根底には歌道の秘伝書の反映がうかがえるが、『茶器名物集』奥書に「茶の湯には師匠はない。ただ、古唐物を多く見て昼夜茶湯を飲むことであり、これが師匠である」と書かれ、茶の湯には昔から書物や師匠がいないと説いている。また、『山上宗二記』には、「茶湯ノシヨウ習ハ古ヲ専ニ用ヘシ。作意ハ新シキヲ専トス。風躰、堪能ノ先達ニ習ヘシ、其時代ニ逢(合)ヤウニ思索スベシ」とも記されている。

これらとともに、藤原定家の歌の伝書『詠歌大概』に述べられているところと通じるところがあり、茶道伝書の根底に歌道の秘伝書の反映を見るのである。

2. いわゆる「堺伝授」をめぐって

1)「古今伝授」について

「古今伝授」を一言で定義することは極めて困難である。特に、ここ三十年程の間に、古今集の享受史の研究が飛躍的に進展し、その結果、「古今伝授」そのものの持つイメージがずいぶん変わっ

た。従来は、「古今伝授」と認識されてこなかったことも含めて、広く「古今伝授」として捉えられるようになった。

広義には、『古今和歌集』の講義の全般を指し、院政期頃(古今集撰集から約200年)から『古今和歌集』の難語解釈を中心に注釈(講義)が行われるようになった。御子左家(基俊⇒俊成⇒定家)と六条家(顕輔⇒清輔⇒顕昭)の対立および定家の息子・為家さらに孫の為氏の死後、大きくは、冷泉・二条・京極と三流の対立を中心に、細かくは、為世・為相・為顕などの諸流派が加わり、流派对立の混迷を極める。結果として、多くの偽書を生み出すことになった。

狭義には、東常縁(とうのつねなり)より宗祇が受けた講義(特に秘伝の伝授)をはじめとし、以降、その説を宗祇が門弟に伝授したことを指す。宗祇から三条西実隆・宗二(奈良伝授)・肖柏(堺伝授)らに伝授されたとされるが、実隆から細川幽斎を経て、天皇家へと伝授されたいわゆる「御所伝授」と呼ばれるもの以外の実態は明らかでない部分が多い。

2)「堺伝授」について

「堺伝授」を伝える直接の資料は現存しない。ただし、宗祇から肖柏、肖柏から宗訊、その宗訊へ与えられた切紙を、細川幽斎が収集し[天正14年(1586年)月18日]、それを智仁親王に伝えたものが現存する。

また、江戸時代の資料には、「堺伝授」について記述が見られるものがある。例えば、

『清水宗川聞書』(『歌論歌学集成』による久保田啓一校注)には、「古今箱伝授は、牡丹花を本とす。牡丹花は宗祇より伝受也。是は本伝受なれ共、この末を箱伝授と云う。……………」。

『以敬齋聞書』「古今箱伝授の事」(有賀長伯著)国会図書館本によれば、「古今伝授は、一花堂の流有。是は、他阿上人の伝也。堺伝授というは是も箱伝授にて牡丹花の伝也、今は、泉州堺の氏家に所持して其家の宝物の様に成て、歌人にあらされとも、代々是を持伝へ封印して見る事なし。先年長雅(平間長雅)居士、堺に住居の時、見せ参らせしを、一覽の上、又封印して、今に彼家にありしと、師のかたられし。私云、箱伝授とは、口授なしに秘巻の入たる箱をのみ伝ふる事となん。」

3)堺の住人への伝授の実際について

『住吉社奉納千首和歌』(1708年)の雑部の巻頭和歌を詠んだ地下歌人(じげかじん)・蘆錐軒南浦(岡高倫:1649年~1730年)は、平間長雅から歌道に関わる多くの伝書を受け、それらを堺、泉州および奈良の門弟に伝えていることが知られている。

4)二つの「堺伝授」

長雅を中心に実際の堺の住人に伝授されてゆくものと、肖柏から最終的に長雅へと伝わったとされる箱伝授と、言わば二つの堺伝授が考えられる。

そのうち、牡丹花肖柏から長雅に伝えられた伝授は、古今集の秘書、切り紙、系図など三通を三箱に入れた箱伝授であったとする記録がある。後々、この箱伝授は『古今和歌集』の秘書を伝えるという意味としてよりは、その伝授された箱を持っていること自体に意義を持たせ、歌人ではない家にも伝わり宝物扱いをされて伝来することになるのである。

西田正宏氏

1965 年生まれ 博士(文学) 大阪府立大学・人間社会学部・准教授 博士(文学)

研究分野: 日本近世文学(特に、和歌を中心とする)、学芸史

著書:『松永貞徳と門流の学芸の研究』(2006年2月3日、汲古書院)

松永貞徳やその門弟をはじめとする地下(じげ)歌人の学芸が、契沖や本居宣長に代表される、言わば実証的な学問(研究)と同程度の知見に到達していたことを『古今和歌集』や『伊勢物語』などの注釈書の具体的な比較を通して見極めようと努めてきた。学芸史を辿りながら時代の思潮を考えること、またそれぞれの時代の注釈が、どのような学芸の環境の中で成り立ってきたのかの考察が今の課題。



江久庵(北三国ヶ丘町) 2階 多目的ホール